〔年々隨筆二〕多賀城碑は、天平の古物にて、いと〳〵めでたけれど、壺の石文にはあらず、つぼの碑は、古歌どもに、おほくはるぞをよみあはせたるにても、○中略津輕近き所なる事を考るべし、○中略南部殿の考らす地に、つぼ村あり、そこに石文大明神といふ社あり、石文湮滅して後、その跡を神に祭りたりといひ傳たりとなん、これよくかなひておぼゆ、

〔清輔朝臣集〕述懷百首のうち

いしぶみやつがろのをちにありときくえぞ世中を思ひはなれぬ

〔新古今和歌集十八雜〕前大僧都慈圓、ふみにてはおもふほどのことも申つくしがたきよし、申つかはしてはべりける返事に、　前右大將頼朝

みちのくのいはで忍ぶはえぞしらぬ書つくしてよつぼのいしぶみ

〔奥の細路〕抑言古りにたれど、松島は扶桑第一の好風にして、凡そ洞庭西湖に羞ぢず、東南より海を入れて、江の中三里、浙江の潮を湛ふ、島々の數を盡して、欹つものは天を指し、伏すものは波にはらばふ、或るは二重にかさなり、三重にたゝみて、左に別れ右に連らなる、負へるあり抱けるあり、兒孫を愛するが如し、松のみどりこまやかに、枝葉汐風に吹きたわめて、屈曲おのづから撓めたるが如し、其の景窅然として、美人の顏を粧ふ、千早振る神のむかし、大山祇の爲せる業にや、造化の天工、いづれの人か筆を揮ひ言葉を盡さん、雄島が磯は地つゞきにて、海へ出でたる島なり、雲居禪師の別室の迹、坐禪石などありて、將た松の木陰に世を厭ふ人なども稀々見え侍りて、落ち穗松笠など打ち煙りたる草の庵、考づかに住みなし、如何なる人とも知られずながら、先づなつかしく立ち寄るほどに、月海にうつりて、晝の詠め又あらたむ、江上にかへりて宿を求むれば、窗を開き二階を造り、風雲の中に旅寐するこそ、あやしきまで妙なるこゝちはせらるれ、

松島や鶴に身をかれほとゝぎす　曾良